



目次

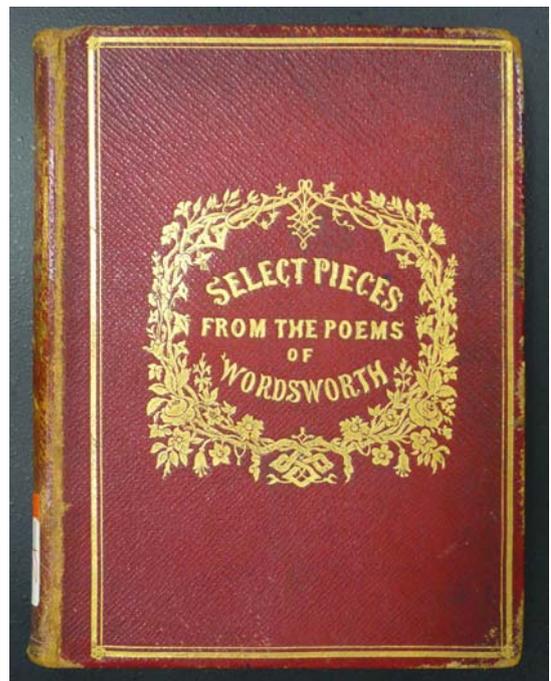
貴重書紹介「ワーズワース詩選」(Select pieces from the poems of Wordsworth)・・・p.1,4  
通訳は、どんな商売か 古川 亜希子・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.2-3

「ワーズワース詩選」 (Select pieces from the poems of Wordsworth)

ヴィクトリア朝は、たしかに近代英国の黄金時代であった。その時代的個性を好むかどうかは今問題としない。文学史上では浪漫主義隆盛の季節であり、絢爛豪華な書物文化が咲き誇った時代である。そして、本学図書館のイギリス浪漫主義文学に関するコレクションは、日本最高水準にあると評してよい。内容・装丁ともに瞠目すべき書籍群が必ずしも十全に活用されていないことのそれはそれとして、今回イギリス浪漫主義の代表的詩人であるワーズワース (1770～1850) の詩集を取り上げる。ちなみにこの詩人は、我が国近代文学にも大きな刺激を与え、島崎藤村・宮崎湖処子の詩に影響著しく、特に国木田独歩の作品において、ワーズワースは不可欠の源泉である。

掲出本は、最晩年の詩人から大英帝国ヴィクトリア女王への献辞がタイトルページを飾り、ついで1845年の序文、4ページ目に「ワーズワースの作品は若い人たちにとって近づきたいほどに膨大なので、教育的見地から適宜作品を選択した。作者自身も承認・肯定した選び方である」との趣旨説明がある。深紅のモロッコ革装丁、3方金の8折本。Lucy Grey以下67篇の詩を264ページに印刷する。

見所は3つ。まず第一に、詩人の数多い詩作から本人の意向に沿った選択を行い、若者向けとは言いながら、結果として適切簡明なワーズワース入門となっていること。



(図版 前表紙のデザイン)  
(4ページに続く)

## 通訳は、どんな商売か

フリーランス会議通訳者 古川 亜希子

「私はうなぎだ」

おなじみの小説『吾輩はうなぎである』の書き出し、であるわけではない。場所は鰻屋。言葉がどんな文脈で発せられたかわかっていれば、「いや、あなたはうなぎではなく人間のはずだ」などと、間抜けなツッコミをしなくてもすむ。では、英語に直してみよう。“I am an eel.” いやいや、それでは鰻屋でなくレストランであったとしても、みんな目が点 (look stunned) になってしまう。

様々な会議やビジネスの現場へフリーランス会議通訳者として赴くが、「日本語を聞けば、何でも即英語に訳せる。逆もまた然り。」と、思っている御仁がいかにも多いことか。西欧と比べて、我が国では通訳という作業の大変さを全く理解していない人が多いとされる。実はアメリカ人もヨーロッパ人に比べて通訳業務やその重要性が理解出来ない人が多いらしい。これは、国内に於けるコミュニケーションが主に単一言語で行われており、外国語習得が苦手な国民の特徴なのかもしれない（日本語のせいではありません）。

通訳という仕事のなんたるかをわかっていない例。たとえば、社内会議の通訳依頼にあたって、資料の提供や事前打ち合わせをお願いすると、「たいした内容じゃないから、その場で縦のものを横にしてくれたらいいんだ」という担当者にはしばしばぶつかる。彼／彼女は「社内用語を含め社内の常識（往々にして社会の非常識）や仲間内で共有されている暗黙知などが部外者に分かるはずがない」という単純な事実を認識する力をこれっぽっちも持ち合わせていない、らしい。だいたい機械でこしらえた書類が氾濫するこのごろ、縦のものを横にしようにも、もともと横書きだから当惑するほかない。

そこで通訳者が「あ、そうですか。じゃあ。」とやって “I am an eel.” とやったら、担当者殿お口あぐり (gape in astonishment) であろう。「縦のものを横にした＝言葉を置き換えた」だけでは、原発言のメッセージが伝わらない。むしろ「縦のものを横に」しては駄目なのだ。通訳者を使う、とは「コミュニケーションの重要な部分、メッセージの解釈と伝達を他人にゆだねるということだ」と認識している日本人は非常にすくない。だから、「縦のものを横にしてくれりゃいい」となる。同じ日本語を使う者同士でも誤解が発生することは多々ある。まして、話し手と聞き手との間に通訳者という他人が介在し、別の言語に変換を繰り返すのだから、正確に伝わることの方がある意味、奇跡に近いのだ。

通訳者にろくな資料も事前情報も与えず、「聞こえたことをそのまま訳してくれたらいい」などという依頼は、「形だけ通訳がついていればいいんだ、内容が伝わらなくて」と宣言しているようなもので、プロ通訳者としては正直お断りしたい。「だったら、通訳／翻訳ソフトかなんか使って、自分でやれば」と返事したくなる。なぜなら、「通訳する」ということにおいては、語学力すなわち言葉を操る力（言語の4技能＝読む・聞く・話す・書く＝に関わる力）より、理解力が優先するからだ。ちなみに、私は小さい子供に外国語を教えることにあまり賛成しない。慣れた言葉でいっぱい本を読み、友達や家族といっぱいおしゃべりをし、自由に書き、歴史・文化・芸術・自然科学なんでも興味を持つ。そのほうがずっといい。

話は戻って、「聞こえたことをそのまま訳してくれたらいい」としたら、どうなるか。「鯖威張る」、これは、その昔「サバイバル」と打ち込んだときにパソコンが変換した日

本語(?)だ。鯖だって鯛相手に威張ることもないとは限らないから、間違っているとは断定できないが、通常このような意味で「サバイバル」と入力することはないだろう。「聞こえたことをそのまま訳す」と、話し手の意図しないとんでもない訳＝変換がなされる危険性がある。

もう少し現実的な例。内閣府(いきなり高級になった!)が毎月発表する月例経済報告書に見られる「日本経済は踊り場にさしかかった」という表現、「踊り場」を dancing floor なんてやった日にゃ、その通訳者は業界から抹殺されること疑いなし。この場合の「踊り場」は lull。しかし階段の「踊り場」だったら landing が、学習曲線における「踊り場」の意味ならば plateau が適切だろう。単語レベルでさえこれだ。I have a request to make. といわれたときに、話し手と聞き手の立場や力関係などをちゃんと理解し、「お願い申し上げたいことがあるのですが・・・」と片づけるか、「ちょっと頼みたいことがあるんだけど」とするか、または「相談なんだが」とやるかで、商談もしくは恋愛の行方もずいぶん変わってくる。だから、文章や話全体では通訳課程でどんなに大きなズレが発生するか想像に難くない。通訳者たるもの、話し手が伝えたいことを理解し、最適な表現に訳出＝変換して誤解のないように聞き手に伝えなければならない。しかも同時に、だ。同時通訳ならば、勿論聴きながら「同時に」訳出するのである。

通訳者の仕事とはいかに。それは、「通訳する(interpret)＝発言を解釈する」つまり話し手のメッセージを伝えることなのだ。言葉が発せられた経緯・文脈・話し手の思考の癖・聴き手との関係、なにより話題の中身(森羅万象なにが出てくるかわからない)について、さまざまな周辺知識を総合しそれらを出来る限り盛り込んで、別の言語に訳し上げるのが、私達通訳者の仕事なのである。

では、通訳という作業を担う者に一番大切な資質はなにか?それは帰国子女であるとか、外国語がぺらぺら(または、へらへら)だとかいう語学力ではないのである。一番大切なことは、話し手の言わんとしていることを理解する力であり、理解したことを別の言語で正確に聞き手に伝えるのが二番手の力である。母国語で正確に理解したり伝えたりすることが出来ない人が、外国語でなされた他人の発言の意味するところ(メッセージ)を理解し、別の言語に移し替えて正確に伝えることなどできるわけもない。というのも、私達は日々様々なことを考えているが、普通それは母国語を介しての作業である。母国語がしっかりしていなければ、自分の考えをうまくまとめることが出来ない。ましてそれを他人に適切に伝えることが出来るはずがない。同時通訳・逐次通訳のいずれでも、いわゆる帰国子女が必ずしも多くはない事実は、思考と理解の軸になる母国語がしっかりしていない故、という説があるのも一面うなずける。

であるから、通訳学校に来る受講生に対して、私が常にいうことは「まず、母国語の力を磨きなさい」である。「そのためにはとにかくなんでもいい、母国語・外国語を問わず沢山読んで知識を増やし、語彙や表現を豊かにするとともに、想像力と理解力を深めなさい。母国語がしっかりしていないのに通訳なんてとんでもない。」と。

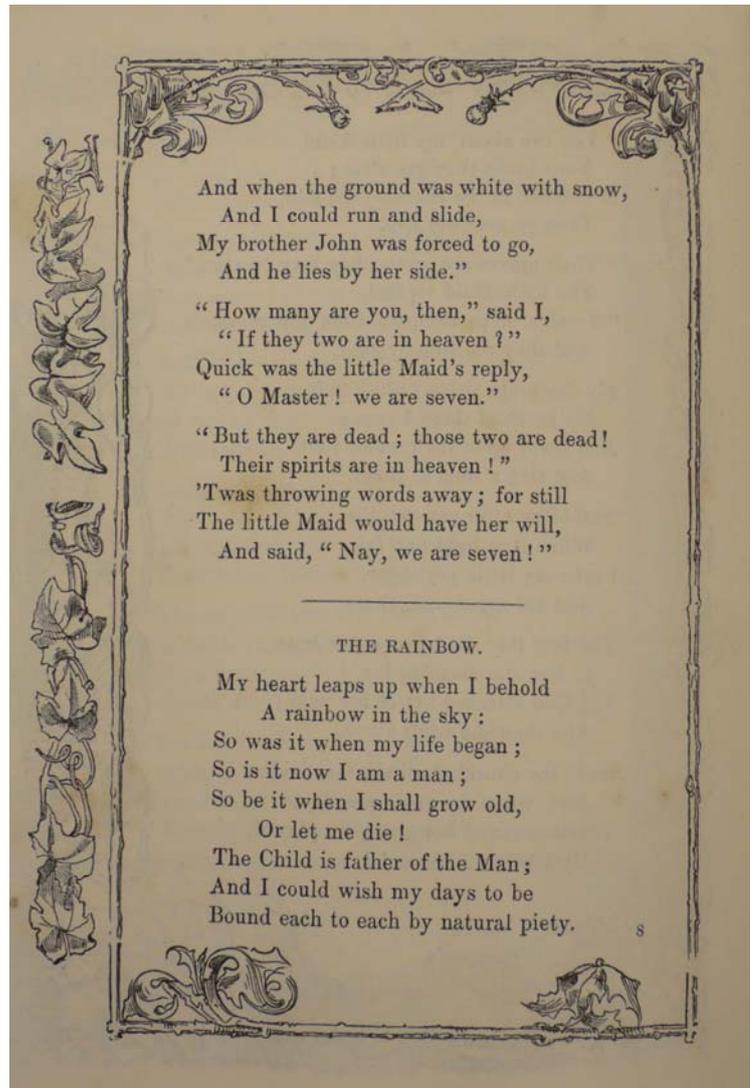
外国語が上手といわれて、伝わらない言葉をぺらぺらしゃべるだけでは、お金になりません。プロの通訳者は「理解のプロ」なのです。ついでに、この商売に関心のある方へ、米原万里『不実な美女か貞淑な醜女か』をお勧めしておきます。

Unagi for me!

(ふるかわ あきこ)

第二に、その魅力的な挿絵と飾り枠。細密な銅版画（エッチング）や写真の新技术にと  
もすれば押されがちな木版画であったが、ヴィクトリア朝はこれに新風を吹き込み、芸術  
性の高い精緻な表現を展開する。版刻の切れ味に絶妙の階調を加え、画家の感性と彫り手  
の技が冴える名品を多く生み出した。そうした豪華出版の典型は、ワーズワース没後ラウ  
トリッジ社（Routledge）から出された詩集（“Poems”）であり、版元は100枚の絵のため  
に彫り師へ1,025ポンド支払った（Paul Goldman “Victorian illustrated books”）。  
当時の1ポンドは現在の35ポンド以上らしいので、単純に計算すると35,875ポンド。さ  
らに為替レートの1ポンド約160円のかげ算をしてみてください。

第三に、モロッコ革の装丁。赤  
地に金型押し模様の意匠は、美麗  
ではあるがヴィクトリア朝の装丁  
としては必ずしも最上級のものと  
は言えない。これが貴重なのは、  
版元装丁（Publisher’s binding）  
のゆえである。書物購入者が自分  
の好みにあわせて装丁するのが一  
般であった時代において、版元す  
なわちエドワード・モクスン社（E.  
Moxon, テニスの初版本を数多  
く手がけた書肆）が装丁したもの  
で、発売当時の革装のまま、現在  
に伝えられた。しかも通常版元装  
丁は、濃緑色の布を用いた比較的  
地味な体裁であるから、モロッコ  
革使用は珍しい例。出版社の意気  
込みをうかがうことができる。



（図版 「子どもはおとなの父親」の詩句で  
よく知られた「虹」（Rainbow）のページ）

アゴラ－鶴見大学図書館報－ 第132号 2008年11月11日発行

編集・発行 鶴見大学図書館

〒230-8501 横浜市鶴見区鶴見2-1-3 Tel:045-580-8274 Fax:045-584-8197

鶴見大学図書館ホームページ <http://library.tsurumi-u.ac.jp/library/>